

梶田孝道・丹野清人・樋口直人著
『顔の見えない定住化』

——日系ブラジル人と
国家・市場・移民ネットワーク』

評者：佐藤 忍

I

本書は、日系ブラジル人の労働者およびその家族の存在様式を規定する論理構造の解明をめざしている。これまでの研究状況は著者たちにいわせれば、「記述的な事例研究中心主義」（52頁）でしかない。だからこそ著者たちの主たる狙いは「世界的な移民研究の蓄積を踏まえた」（22頁）「日本の現実に即した理論化」（91頁）である。移民政策論、労働市場論、ネットワーク論に関わる世界的な研究動向のうえに立脚し、そしてそれらを相対化し、そのうえで日系ブラジル人の特殊性を明らかにしようとしている。そのさい移住システム、就労形態、そして生活意識のそれぞれの場面を連結する論理、総体を貫く論理が提示される。本書は3人の共著であるが、著者一人ひとりの研究の寄せ集め、ある種の論文集といったよくある類の本ではない。3人が緊密に連携し、すり合わせ、ひとつの作品へと見事に仕上げている。日系ブラジル人の存在様式の特殊性を規定する論理構造にもとづいて、あるべき政策が提言されている。この特殊性を凝縮的に表現するキーワードが、本書のタイトルでもある「顔の見えない定住化」である。「本書は、外国人労働者がそこに存在しつつも、社会生活を欠いているがゆえに地域

社会から認知されない存在になることを『顔の見えない定住化』と呼ぶ。」（72頁）タイトルそのものが本書の主張であり、まさしく顔である。副題の「国家」は移民政策を、「市場」は労働市場を指す。「顔の見えない定住化」という日系ブラジル人の存在様式を規定する論理構造を移民政策、労働市場、移民ネットワークの相互連関のなかに分析し、それにもとづいて統合政策の提起へと導く、きわめて総合的で、しかも迫力に富む作品である。

II

本書は3部11章から構成されている。詳細な目次は紙幅の関係で省略し、大まかな展開を紹介すると次のようになっている。

第1部「国家・市場・移民ネットワーク」は理論編である。3章構成である。国際労働移動の主たる規制力として国家、市場、移民ネットワークをとりあげ、それらのファクターがしながら日系ブラジル人にかんしてきわめて変則的に作用している点にとくに注意が喚起される。その特異性に焦点を定め、その論理の徹底した解明こそが研究課題として提起される。そして本書における論理展開に不可欠の用語について解説がなされている。理論的枠組みを整理したのち、第2部「顔の見えない定住化」において本格的な実態分析がなされる。5章構成である。移民政策、労働市場、移民ネットワークの分析から「顔の見えない定住化」という特異な存在様式の生成原理が明らかにされる。そして第3部「多文化共生モデルの陥穽」へと議論は進む。共生モデルに対して統合モデルを対置し、政策提案を試みている。

以下では本書の概要をその柱である移民政策、労働市場、移民ネットワーク、そして統合政策に即して整理し紹介してみよう。

[移民政策]（第1章、第4章）

「ネーションフード」、「デニズンシップ」そ

して「パーソンフッド」という3つの影響力は移民政策のありかたを規定する重要なファクターである。移民国、非移民国の区別をこえて観察される移民政策の収斂傾向は、本書によれば、これらの諸力が相互に影響しあうことで生起している現象である。そしてこのことから「政策意図と結果の乖離」がいたるところで発生している。「ネーションとエスニシティの乖離」もそのひとつである。日本の移民政策にもこうした諸力は影響を及ぼしており、その意味で日本も世界的な趨勢のなかに位置しているのであるが、日本の特質はこの乖離の大きさである。本書の強調点はここにある。

入管法改正による日系人への定住者ビザの付与とその後における日系人の急増という事実とは、「政策意図と結果の乖離」の顕著な事例である。本書の検証によれば、「政府が日系人を『外国人労働者』として導入したという事実を証拠立てる明白な資料は存在しない」(113頁)。にもかかわらず急増した日系人はまさしく「意図せざる結果」なのである。定住者ビザの創設には2つの「解釈」がありうるという興味深い指摘がなされている(118-119頁)。また定住者資格の吟味からは「日本が無制限ともいえる血統主義を採用していないこと」(120頁)、さらには過去に遡ってみても「日本には強固な国民原理は必ずしも存在していたわけではない」(134頁)という意外な指摘もある。そして「日系人のエスニシティの虚構化」、「日系人という法的資格と社会学的現実との乖離」(125頁)が「政策の失敗というより、政策の放置」(48頁)により拡大していると主張している。

〔労働市場〕(第2章、第6章、第7章)

本書における労働市場論の特徴は「企業者の立場から」(66頁)アプローチしているという点である。「制度としてのブラジル人労働市場に焦点を当てると、それは業務請負業の研究と

ならざるを得ない」(163頁)。業務請負業という業態の存在意義ない役割を産業構造のなかでどのように把握するかという点が本書における労働市場論の要である。業務請負業の機能を「インターフェース装置」と「切り離し装置」という聞き慣れない2つの概念によって把握している。前者の概念は業務請負業から派遣される労働力を利用する個別企業にとっての機能を指す。つまり利用する企業の側からみた労働市場の外部化を指す。重層的な産業構造のなかでそれを捉えるとき、いかえれば労働市場の外部化の産業組織上の機能把握として後者の概念が提起されている。産業組織上の雇用調整機能と考えてよいであろう。

こうした労働市場論が解明しようとする課題は、「下請け構造のなかに占める外国人雇用の変化」(66頁)である。課題設定はきわめて限定的である。本書が明らかにしているところによれば、外国人の雇用を中止した企業、継続している企業、日本人に切り替えた企業など、利用企業の外国人雇用戦略には多様化と代替化のプロセスが観察される(68-70頁, 173-175頁)。そして業務請負業をつうじて派遣されるブラジル人の労働市場における役割について次のようにまとめている。「日本人の周辺部労働市場が払底していた時期には、業務請負業に空費の縮減の雇用と費用の削減の雇用の両方が求められた。だが、日本人が周辺部労働市場に戻り始めるやいなや、二つの雇用は分離し始める」(180頁)。「空費の縮減」とはすぐに切れる雇用調整としての機能のことである。「費用の削減」とは低賃金のことである。低賃金の職場は女性パートや高齢者によって奪われ、ブラジル人は雇用調整機能に純化していくというのである。

〔移民ネットワーク〕(第3章、第5章、第8章)

「移民ネットワークは、移動局面における移

住システムと居住局面における移民コミュニティを統合する概念」(78頁)である。移住システムは社会的資本を移住先に移植し、蓄積する。そこに移民コミュニティが形成されると考えられる。本書はこうした単線的な理解に疑問を呈している。「アメリカの文脈を相対化し単一の移住システム論から脱却して、文脈の相違を重視した『移住システムの比較社会学』を構想すること」(91頁)を意図している。そこでまず移住システムおよび移民コミュニティの類型化を試みる。「移住に必要な資源の取引形態」(79頁)が斡旋組織という市場かそれとも相互扶助という互酬かによって2つのタイプに分類されている。市場媒介型と相互扶助型である。また人的資本と社会的資本の多寡にもとづいて移民コミュニティを4つの理念型に分類している(86-87頁)。

まず移住システムについて次のことが確認される。「ブラジルから日本への人の移動は、入国規制が緩やかでありながら、越境・就労の補助を斡旋組織が提供する点で、世界的にみても珍しい部類に属する」(141頁)。とりわけ「家族帯同で来日する者、学歴が低く渡航費を負担する余裕のない者」(161頁)による依存度が高い。市場媒介型移住システムは「労働のジャストインタイム供給システム」(155頁)として機能していると解釈している。ついで移民コミュニティに視点を移す。エスニック・ビジネスの動員資源、宗教活動、各種アソシエーション活動の分析をつうじて、「氷山の上にあって相対的に安定した一部の企業家と、氷山の下でたえず入れ替わる大多数の労働者の乖離」(235頁)が生まれているとする。それは理念型に即して分類すれば、人的資本も社会的資本もともに乏しい「解体コミュニティ」である。したがって「コミュニティの形成が社会的資本の蓄積につながり、日本社会でおかれた不利な状況の改善

に至る可能性はあるのだろうか」(232頁)という期待は楽観的にすぎるのである。

[統合政策] (第9章, 第10章, 第11章)

かくして「顔の見えない定住化」という独特の存在様式が移民政策、労働市場、移民ネットワークの相互関連の論理の必然的帰結として描かれた。児童の不就学問題、保見団地に象徴される居住問題、国保加入問題などの社会問題はこうした存在様式の発露である。また滞日見通しにかかわる意識にもそれが反映されている。「来日時の居住予定」と「調査時の居住予定」との比較から当事者の意識が次のように把握されている。「定住化仮説は当てはまらず、日本とブラジル両国に居住地を持ち両国を行ったり来たりするというトランスナショナル仮説も該当しにくい。ほとんどの当事者が、日本での在住をあくまでもデカセギと考えている」(260頁)。また低学歴ほど長期滞在志向が強く、学歴が高いほどターゲット・アーナーとしての性格が強まること(268頁)、しかもターゲット・アーナーほど消費活動が活発であり、「出稼ぎエンジョイ型」とも表現されうること(270頁)といった予想を裏切る結果が示されている。そして滞日予定の質問に「わからない」と答えた者が4割程度いる点について、「確たる見通しを持たず来日し、現在の生活実感を持つことができず、将来の展望もはっきりしていない層が大きなセグメントを構成している」(277頁)と述べている。

そして最後に「現在支配的な『顔の見えない定住化』を帰結する均衡から、より人間の発達に寄与する均衡に至るための条件」(286頁)の提示へと議論は展開する。「市場の規制に対する国家の無策が、移民コミュニティの失敗を生み出した」(285頁)のであるから、「市場の一元支配ではなく互酬的関係が優位になるような文脈を、まず用意する必要がある」(292頁)。

問題は日本人とブラジル人とのあいだの文化的な共生ではなく、不安定雇用を生む労働市場に対する規制の欠如であり、政府の無策であると主張する。それゆえあるべき解決策は、文化的な共生ではなく、権利の付与による多元性と平等の推進である。それが本書のいう統合政策である。労働政策面では業務請負を利用した間接雇用、有期雇用に対する社会保険上の規制強化が、教育政策面では外国人子弟に対する入試方法の改善や特別定員枠の設定が提言されている。

III

以上が本書の大まかな概要である。論旨はきわめて明瞭であり、論理は一貫している。「顔の見えない定住化」という日系ブラジル人の特異な存在様式とその生成原理がよく描かれている。日系ブラジル人の存在様式を貫く論理構造をここまでトータルに、そして骨太に解き明かした研究はこれまでなかったといつてよいであろう。まちががなく研究の新しい到達点である。

とはいえ書評の筆をとった者のつとめとして、最後に、感じた問題点を指摘しておきたい。本書はアンケート調査や現地インタビューをつうじて収集した膨大なデータに基づいている。「補遺 調査データについて」(307-312頁)をみよ。住み込み調査や参与観察もなされているから、ハンパではない。にもかかわらず裏付け

となるべき客観的なデータが十分ではないように思われる。たとえば労働市場についていえば、日系人雇用における業務請負業の比重、業務請負業における、そして派遣先における日本人を含んだ雇用動向、離職率、勤続年数、賃金水準、配置される職場などの具体的な情報が残念ながら乏しい。また生活意識についても来日時ないしアンケート時点での滞日予定期間がデータとして用いられており、実際の滞日期間との関連が議論されないのは不思議な気がした。住居や職業の選択行動に変化はみられないのであろうか。さらに「リピーター層」を「来日年にかかわらず帰国したことがある者」として数量把握を試みている点も気になった。夏期休暇等の帰国期間を問わないのであれば、「帰国したことがある者」は多くなって当然であろう。移住システムについても市場媒介型に対比される相互扶助型にかんするデータが手薄であるように思われた。市場媒介型の日伯間構造の特質もいまひとつクリアーではない。「顔の見えない定住化」の実証的な肉付けに今後の課題が残されているように思われる。

(梶田孝道・丹野清人・樋口直人著『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、2005年2月、vii+316+25頁、定価4200円+税)

(さとう・しのぶ 香川大学経済学部教授)